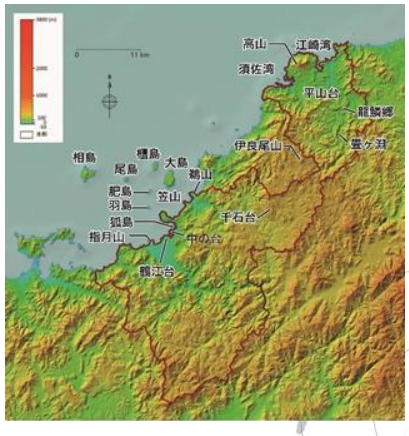
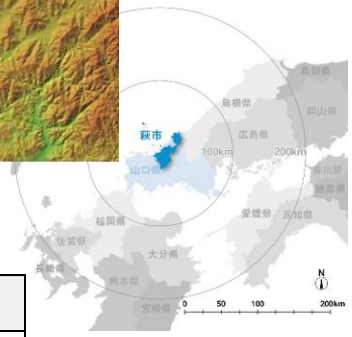
21　萩市文化財保存活用地域計画　【山口県】

【計画期間】令和６～15年度
（10年間）
【面　　積】698.31㎢
【人　　口】約4.2万人
【関連計画等】
世界文化遺産 「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」（H27年7月）
萩ジオパーク（日本ジオパーク、H30年9月）
歴史的風致維持向上計画（第２期、H31～R10年）





推進体制

指定等文化財件数一覧

種別	区分		国 指定	国 選定	国 選択	国 登録	県指定	市指定	計
有形文化財	建造物		8	-	-	8	6	26	48
	美術工芸品	絵画	1	-	-	0	1	13	15
		彫刻	3	-	-	0	5	17	25
		工芸品	2	-	-	0	0	13	15
		書跡・典籍	1	-	-	0	3	3	7
		古文書	0	-	-	0	0	1	1
		考古資料	0	-	-	0	2	2	4
		歴史資料	1	-	-	0	1	3	5
無形文化財			0	-	1	0	1	1	3
民俗文化財	有形の民俗文化財		1	-	-	0	0	3	4
	無形の民俗文化財		0	-	-	0	3	10	13
記念物	遺跡（史跡）		14	-	-	0	4	20	38
	名勝地（名勝）		1	-	-	0	0	0	1
	名勝地及び地質鉱物		1	-	-	0	0	1	2
	動物、植物、地質鉱物（天然記念物）		7	-	-	0	6	17	30
文化的景観			-	0	-	-	-	-	0
伝統的建造物群			-	4	-	-	-	-	4
合計			40	4	1	8	32	130	215

指定等文化財は、２１５件
未指定文化財は、１，２８４件を把握

萩の歴史文化の特徴

①日本海と阿武の大地に根付く多様な暮らしと景観

日本海と阿武火山群がもたらした肥沃な大地のもとに、先史から古代・中世・近世を通じた長い年月の中でその土地に適した耕作や漁などが行われ、これを生業とする集落や寺社が根付き、海と大地の恵みに彩られた多様な暮らしが続き、今に至っている。

八町八反

②今に続く萩城下町の空間とその文化

毛利氏によって河口の三角州を巧みに利用して開かれた萩城下町は、湿地帯を開発することでその後の町の拡大を進め、街道を通じたネットワークにより領内とも繋がり、政治・経済・文化の安定を達成した近世城下町の到達点といえる。

指月山と萩城跡

③近代日本の先駆けと今に残るまちなみ

幕末から明治にかけて日本の近代の先駆けとなった萩は、多くの志士たちを育んだひとづくりや産業化のストーリーが幾重にも重なり、これらを物語る旧宅や遺構、史料が随所に残されている。萩のまちは萩の人々によって住みこなされ、ここに魅了された多くの方が全国から訪れるまちとして現在に受け継がれている。

松下村塾講義室

[将来像] 文化財が“萩のおたから”として大切に引き継がれ、私たちのこころと暮らしを豊かにするものとなる

[基本理念]

- 文化財の適切な保存と活用により、観光地づくりと産業振興につなげる
- 文化財を通じて、子どもたちのふるさとの誇りを醸成する
- 文化財とともに、あらゆる世代が活躍するまちをめざす

[基本方針]

文化財の再発見・保存・活用・魅力発信

課題

- これまで、地域の「おたから」の拾い出しを進めてきたが、拾い出しが地域や種別において偏りや濃淡がある
- 所有者の高齢化や地域の過疎化により、文化財の日々の見守りや草刈り、清掃などが難しくなってきている
- 修理が急がれる指定等文化財がある　　等

行動目標

- 調査・研究により文化財の価値を発見する
- 文化財の適切な保存・整備と維持管理を図る
- 文化財を現地にありのままで展示・解説する

主な措置

4 萩の文化財データベースの充実と公開

[行政・団体等 / R6～15]

- 国、県の文化財データベースと連携し、萩の文化財データベースの充実を図り、市民への公開と活用に資する
- 萩まちじゅう博物館の活動による新たなおたからの掘り起こしとおたから総会での認定・登録による「萩おたからデータベース」の充実を図る

7 文化財の修理・整備事業

[行政・行政・専門家等 / R6～15]

- 指定等文化財の保存修理及び整備活用事業を行う

修復が急がれる史跡「萩反射炉」のレンガ破損調査と見学会の様子

文化財を通じた多様なコミュニティの形成・活動の推進

課題

- 地域で行われている祭礼や伝統行事の担い手が減少し、運営が難しくなっている
- 文化財の保存と活用に関心のある団体や事業者もあり、これらを繋げるような仕組みが求められている
- 萩の文化財を舞台にした移住や定住など、さまざまな分野で文化財を対象とした新たなニーズが生まれている　　等

行動目標

- 市民が文化財に親しむための機会を増やす
- 市民と来訪者が文化財を通じて交流する場をつくる
- 文化財を通じて多様な関係人口の創出を図る

主な措置

19 文化財を活用したコミュニティ活動の創出と推進

[行政・所有者等・市民・団体等 / R6～12]

- 地域において文化財建造物等を舞台とした地域のイベント、文化財をテーマとした交流会などを推進する

23 文化財の新たな活用とそのルールづくり

[行政・団体等 / R6～15]

- 文化財をユニークベニュー（特別な場所で特別な体験）として活用する。また、そのための適切かつ効果的に実施するためのルールづくりを行う

文化財建造物を使った移住者向けお試し住宅

文化財を活かした経済活動の推進

課題

- 文化財を活用した萩ならではの体験・交流を主体とした観光コンテンツが求められる
- 伝統的な産物や産品のブランド化が求められているが、そのことに文化財としての価値や魅力、ストーリーが反映されていない
- 文化財の積極的な活用又は新たな活用を考えている人への支援が必要である　　等

行動目標

- 新しい時代の萩の文化観光を確立し、展開する
- 萩の文化財の多様な価値と魅力を見える化する
- 文化財による社会と経済の地域内循環を生み出す

主な措置

29 文化観光のコンテンツづくりとその磨き上げ

[行政・所有者等・団体等/ R6～15]

- 各団体・事業者が実施する文化財を活用したコンテンツの開発とブラッシュアップを継続的に支援し、展開する

32 地域産業振興構想と連携した文化財の持続的な保存と活用の循環の仕組みづくり

[行政・所有者等・団体等・事業者等 / R6～]

- 公有の文化財等において、コンセッション方式の導入など文化財建造物の民間活用を推進する
- 古民家空き家・空き施設等の自律的な再生と運営を促進する仕組みづくり進める

スモールコンセッションによる公有文化財施設の民間活用事例「本と美容室 萩店」

文化財を活かす人材の育成

課題

- ガイドの高齢化が進んでおり、後継者育成が急務である
- 高校の探求学習や小中学校のふるさと学習など地域をテーマとした学習が推進されており、これらの学習と文化財を結び付ける
- 文化財と他分野を結び付け、まちづくりや経済活動に活かす人材が求められている　　等

行動目標

- 文化財の価値を理解し、魅力を伝えることができる人材を育成する
- 子どもたちがふるさとを自分の言葉で語ることができるようにする
- 文化財と人や社会を繋ぐ人材（コーディネーター）が活躍する

主な措置

35 ガイド等による文化財の解説とおもてなしの実践 [団体等・行政・所有者等 / R6～15]

- 市民を対象とした萩の文化財や歴史文化に関する研修会の継続的に開催する

39 地域の文化財を題材とした探求学習やふるさと学習の推進 [学校・行政・団体等 / R6～15]

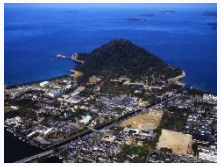
- 文化財や萩の歴史文化を対象とした高校の探求学習、小中学校のふるさと学習を推進する
- 市内の小学5年生を対象とした子供ものしり博士検定を継続して実施する

高校生が自ら考案した「世界遺産周遊クイズラリー」の宣伝活動

9つの「萩ものがたり」（関連文化財群）

A 近世城下町のすべてがここにある
-萩城下町絵図がそのまま使える町-

毛利氏の城下町は、慶長９(1604)年、萩に開府される。阿武川河口の三角州から日本海に突き出た指月山山麓に城郭を構え、周辺の砂州を利用し武家地や町人地、寺院群を配置し、まさに毛利氏の理想都市として260年間にわたり発展を続けた。その後も、湿地帯を開作しながら城下の拡大を図り、かつての城下町の町割りのほぼ全てが400年以上経った今なお受け継がれている。


指月山と萩城跡

B 日本の工業化はここからはじまった
–工業化初期の遺産群とその原風景-

萩藩は、城下町を基盤に優れた人材を輩出し、維新に繋がる進取の精神と実行力により黎明期の日本の工業化を先導した。そして現在も、この時代に生み出された工業化初期の遺産群とともに、その基盤となった幕末の社会の在りようを今に伝える原風景が広がっている。

「鉄道の父」井上勝誕生地

C マグマ胎動のまち・萩
-阿武火山群がデザインした大地と人の暮らし-

萩市を含む山口県北部には、活火山としては日本で数少ない単成火山が約50箇所に分布しており、「阿武火山群」と呼ばれている。１箇所でたった１度しか噴火をしなかったこの火山群の影響により、萩市の大地と島々が形成され、その地形や地質に見合った気候や土壌、生態系が育まれ、今の私たちの暮らしの基盤となる特徴ある歴史文化や産業がデザインされた。

長門峡

D 一楽二萩三唐津と謳われた萩焼と その文化　–毛利御用窯から現代陶芸まで-

萩焼は、毛利輝元が、高麗の陶技をもつ陶工を萩に伴い、萩藩の御用窯として開窯させたことによって始まった。「一楽二萩三唐津」と謳われ、声価が高い萩焼は、江戸時代に茶道文化とともに繁栄する。
穏やかな釉薬の色合いと手取りの良さ、使い込むほどにその表情を変える「萩の七化け」などが萩焼の特徴で、伝統的に受け継がれている。

萩焼古窯跡

E すべての道は萩城下に通ず
-萩往還・石州街道・赤間関街道のネットワーク-

萩の地に城下町を開いた毛利氏は、中世からの拠点である山口を経由し、瀬戸内海側の藩の港のある三田尻までの萩往還、また東の津和野など石見へと至る石州街道、西の要衝である赤間関（下関）に至る赤間関街道を整備した。街道は領内の拠点を結び、各村には宿駅や市、港の機能を持つ町場がつくられ、近世から近代を通じて、交易や自治が発達し、様々な文化が大いに花開いた。

明木市の町並み

F 千年を超えて続く阿武
-萩藩成立以前の萩の世界-

萩での人々の暮らしの痕跡は、原始にまでさかのぼる。長い縄文時代には山間部や海岸での狩猟・採集生活が、弥生時代に入ると稲作が伝わり、平地を利用しての定住生活が各地で営まれていた。やがてそこから「阿武」と呼ばれる現在まで続くひとまとまりの生活圏が形成され、近世、近代を経て現在に受け継がれている。

円光寺穴観音古墳

G 土塀と夏みかんの町・萩のなぞを解く
-近代を乗り越えた萩城下町-

江戸時代を代表する武家屋敷の「土塀」の背景に「夏みかん」が顔を出す景観は、萩の風物詩の一つとして親しまれてる。この不思議な景観は、幕末に山口へ藩庁が突然移鎮したことを契機に、萩の武家地が「夏みかん畑」になったことに由来する。戦後の高度経済成長期には、当時の社会によって「土塀と夏みかん」の町並みの魅力が見出され、やがて町並み保存と観光に繋がっていく。

土塀と夏みかん

H 萩のひとづくりが近代日本を動かした
-萩藩校明倫館から松下村塾まで-

萩では江戸時代から藩校「明倫館」や私塾「松下村塾」などで、教育によるひとづくりが行われてきた。幕末から明治時代にかけてそれは実を結び、数多くの萩出身者が国政や産業など様々な分野で全国的に活躍し、近代日本を牽引した。明倫館の名前や松下村塾を主催した吉田松陰の教えは、現在も萩の学校で大切に受け継がれている。

旧萩藩校明倫館聖廟
（現・海潮寺本堂）

I 日本海に広がるもうひとつの萩
-海路で繋がる七浦七島・須佐・江崎-

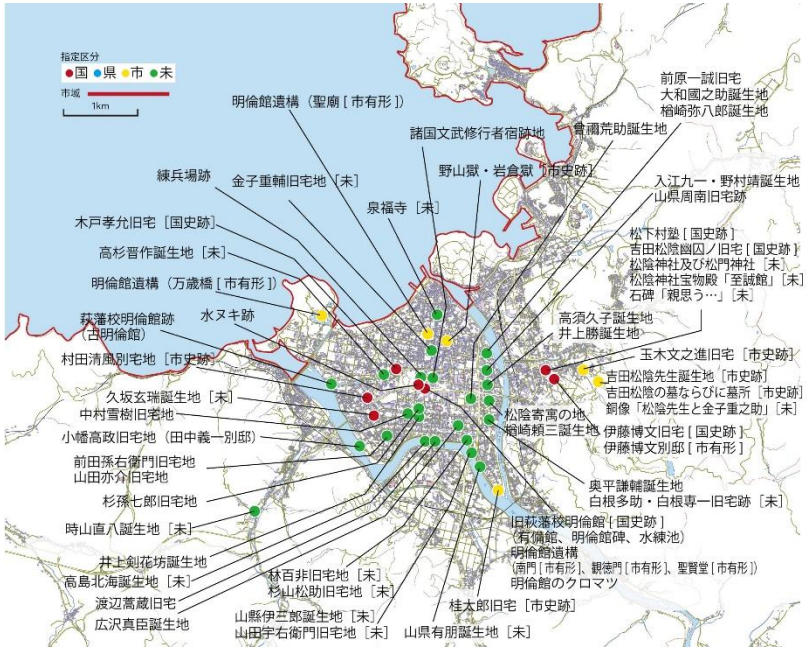
萩は北辺で日本海に面し、長い海岸線の随所に浦と呼ばれる集落があり、沖には火山性の平らな島が点在している。これらの浦と島では、古くから漁業だけではなく、船による交易が行われた。萩藩の成立後、これらは「七浦七島」と呼ばれ、ユニークな自治が展開されてきた。浦や島には限られた土地に住まう一方で、開かれた海によって繋がる陸とは違うもう一つの萩の暮らしがある。

松本川河口で見られる
しろうお漁

主な萩ものがたり（関連文化財群）と課題、行動目標、措置

H 萩のひとづくりが近代日本を動かした―萩藩校明倫館から松下村塾まで―

概要　萩では江戸時代から藩校「明倫館」や私塾「松下村塾」などで、教育によるひとづくりが行われてきた。幕末から明治時代にかけて、それは実を結び、数多くの萩出身者が国政や産業など様々な分野で全国的に活躍し、近代日本を牽引していった。また、明倫館の名前や松下村塾を主宰した吉田松陰の教えは、現在も萩の学校で大切に受け継がれている。



課題

- 幕末維新や近代日本と萩に関する文化財の価値と魅力を十分に活かしきれていない
- 萩に生まれた子どもたちの教育や人材育成に、萩の偉人や幕末維新等のストーリーが活用されることが求められている　等

行動目標

- 幕末維新や近代日本と萩に関する教育プログラムの開発と充実を図る
- 文化財所有者や関係団体等と連携した、萩ものがたり（関連文化財群）を巡る仕組みを構築する　等

主な措置

教育委員会や学校等が勧める志教育に萩ものがたりのストーリーを取り入れる
H-6　地域の文化財を題材とした探求学習やふるさと学習の推進
［行政・事業者/R6～15］
文化財を舞台に、幕末維新や日本の近代化と萩のストーリーを体験・交流できる教育観光コンテンツを展開する

文化財所有者や関係団体等と連携した、萩ものがたりを巡る仕組みを構築する
H-4 文化観光のコンテンツづくりとその磨き上げ
［行政・学校/R6～15］
子どもたちのふるさと学習等として、幕末維新や日本の近代化と萩に関する題材を提供する